

作家

7/25
Ae

氷室 冴子さん

少女小説の可能性を大きく広げた。77年、大学生作家としてデビュー。

「女の子は恋愛はっかりに夢中になっているわけじゃないし、男の子とおなじように友情を大事にしたり、メンツのために我慢したり、一肌脱いだりといったこともするんだ」。そうエッセーに記した通り、大人が少女のふりをするのではなく、女の子が納得できる少女のリアルな生態を、軽やかな筆致で、コミカルな筋運びで描き続けた。

季節ごとに新刊を書き下ろしてきた集英社コバルト文庫の編集部によると「少女が同世代の言葉で同世代の思いを語り、書き手と読者の距離を一気に縮めた。現在のケータイ小説にもつながる『革命』の旗振り役だった」。

ベストセラー「なんて素敵にジャパネスク」の琉璃姫や「雑居時代」の倉橋数子といった主人公と同様、本人も好奇心旺盛で活動的。釣りに料理に、とりわけ舞台の話は止まらなかつた。

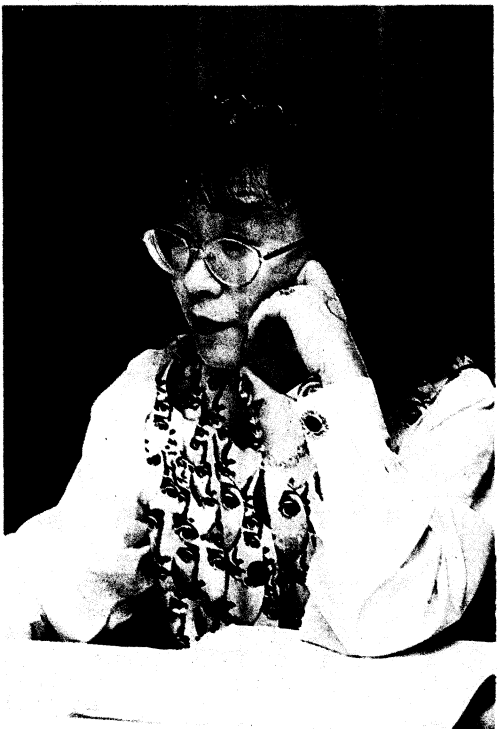
少女の思い、少女の言葉で

宝塚のファンクラブに入り、歌舞伎に通い詰めた。「おしゃべりでざっくばらん。学校に1人はいた面倒見のいい姉御肌のタイプ」。80年代、共に地方の読者交流会などにかり出された作家の新井素子さんはそう、ふり返る。

「いまでも、がはは、という豪傑笑いが、聞こえてきそうな気がする」と話す長電話友達作家、菊地秀行さんは2年前の春、突然、連絡を受けた。

「葬儀委員長をやってくれない？」すでに墓も戒名も葬儀費用もすべて自分で準備していた。葬儀の参列者に向けて、幼少期からの写真を連ねたスライド映像までも用意されていた。

祭壇には、献花に交じり、レモンがいくつか供えられていた。友人の「葬式」に花を贈るのはありきたりすぎるという「恋する女たち」のほんのささやかな挿話。葬儀には、そんな氷室作品のかけらまでを大切にしていた元少女たちが数多く訪れた。(野波健祐)



ひむろ・さえこ

本名碓井小恵子=うすい・さえこ

6月6日死去(肺がん)51歳

6月10日葬儀

93年、小説賞の選考委員会で集英社提供